

よぞらのたいおんけい

「おはようさんですー。いやー、今日も寒いわあー」
 実習生用のナース服に着替えて、ナースルームに入りながら、あたしは思わずそう言つてしもた。病棟の中なんやから温いはずなんやけど、なんとなーくなあ。

正月明け一発目のお仕事なんに、こつ寒いとなかなか気合いはいらへんなあ

「妹尾さん？」

「うやつは、はいつつ!! 痛っ!」

背中からいつもの声が聞こえて、思わず飛び上がった。脳天に一発くらつてもた。

「驚きすぎです。看護学生つて言つても、患者さんから見れば『看護の人』なのよ? もつとシャンとする!」

痛いまんまの頭上げたら、ナース服ピシッと着た

いつもの美人さん 婦長さんや。

この大学附属病院に、もう10年以上勤めてる、ちゆうのに、ずっと東京弁で通してる名物看護師さんなんやけど あたしとはソリ合わんのやるか? 他にも実習の学生おるんに、あたしばっかりゲンコもらつとる気いするなあ。

いや、ひとのせいにしたらあかん。婦長さんの言うことは、もつともなんや。シャンとせんとな、シャンと。

あたしはひと息吸つて、ノートを見直した。ええと、今朝の最初の仕事は 3階の病室を朝にするんやつたな。窓のカーテン開けて、検温と便の様子を聞いて、変わったことあつたらメモつてナースルームに連絡、と。よし。

歩きながらやることさらつてたら、いつの間やら301号の病室が目の前や。あたしはもつかい、大きく深呼吸して、病室に飛び込んだつた。窓にかかった分厚いカーテン、シャシャツ、と開けて、

3 よぞらのたいおんけい

ほな、今日も元気に、いったるかい！

「おはようさん！ 検温の時間やで。ちやつちやと済まして、朝飯あさむしにしよかー！」

あ痛たたたた 毎度のことやけど、痛つたい
なあ、婦長さんのゲンコは。

「あーあ。そら妹尾さん、あんたのタイミングが悪いわ。301号の山内さんは午前ごぜんに検査やから、朝あさこはんなしやもんな」

夜勤上がりで、さつきあたしと交代したばっかの、
准看護師の丸井さんが、あたしの肩かたほんほん、て叩きながらそう言ってくれたけど ん、それだけやない気もするなあ。

山内さん、オレもちやつちやと検査も済ませて昼飯食くいたいわー、言いつて笑わらってくれたしな。

ま、考えててもじゃあないか。婦長さんの言葉の反対やけど、患者さんからは同じに見えても、あたしは学生なんやから。まず体で覚えんと！

「妹尾さん？」

つて、気合い入れとつたんに、背中から声や。な
んやろ。

「はいー、婦長。なんでしようかー 痛つー！」

「語尾を伸ばさない。何度も言わせないで頂戴ちやうだい。」

妹尾さん、ナースルームにお電話よ。春風さんという方から」

「あ、はいはい。すみません」

あつちやあ、どれみちゃんかあ。何度も説明したはずなのに、まだいまいちあたしの仕事理解してへんみたいやなあ。

そう思いながら、あたしは早足でナースルームに歩いてつた。走るんはもちろんあかん、けどのんびりやつとつたら後の仕事がつつかえるし。つと電話のひとつがぴかぴか光つてん。これやな。

「もしもし、お電話替わりました、妹尾で」

『あ、あいちゃん？あのね』

電話の向こう、やつぱ、どれみちゃんや。明るい声は、ひとりぼっちの寮の部屋やったらずつと聞きたいとこやけど

「あー悪いなあ、あたしいま仕事中なんや。患者さん待つとんし、寮に帰ってから」

『わかってる！メール送ったから、必ず今日中に読んでね。そんじゃー！』

あちつ！耳に『ブチッ』て音が残ってる。まあ一応、忙しいのわかってくれてはおるんやな。

せやけど、メール読めって電話で言うかい。よっぽど信用されてへんのやなあ、あたし。そらまあこないだ、実習の仕事が立てこんどるときに、3日もメール読まへんかったて怒られてもうたばっかやけどな

「妹尾さん！電話が終わったらお仕事戻って。早く!!」

「は、はいっつ 痛たっ！」

またや。ちよつと考えてたんはあかんけど、いきなりゲンコやなんて あ、語尾伸ばしてもつてたか。

「ゲンコツの理由は言わなくてもわかってるわね？さ、仕事よー！」

「あ痛たた まだ頭のとつべん、痛いのが引かんわ。今日は何発ゲンコもらつたんやろ」

夕方になって夜勤のひとに引継ぎして、学校の寮に帰った頃は、もう周りみーんな真つ暗やった。

やつぱ疲れたなあ思いながら、2階に上がって端から二つめ。ここが、いまのあたしの部屋や。

ほんまは二人部屋なんやけど、今年は寮に入る人が少ないから、あたしひとりの部屋。そう言ったら、お父ちゃん文句言つてたなあ。『学生の頃からそないな賢沢しとつたら、ロクなもんにならん』やて

まあお母ちゃんが、あれはあたしが家に居なくなる
んがイヤなだけやー、とは言つてたけどな。

カギを回してドア開けて、誰もいない部屋にた
いま言つたら机の上、携帯の着信ランプが迎えてく
れたわ。開けて見ると、着信が5件　みんな、ど
れみちゃんからやな。あたしが仕事で携帯持てない
ちゅつの、5回も試さんと思ひ出せんかなあ。ま、ら
しいつちゅつたららしいんやけど。

着信履歴の脇に、メールのマークがひとつあるわ。
今日見ろちゅつのは、これのことやな。

「やれやれ、なにやつとんのやるなあ。ええと、な
になに　んな!？」

思わず、ひとりごとが途中でつつかえてもつたわ。
タイトルからしてこれやもん。

『ユキ先生から伝言・マジカルステージ準備!』

「マジカルステージで　なんや、いつたい?」

どれみちゃんのいたずらかー?　つてちよつと思つ
たけど、そんならわざわざユキ先生の　魔女界の
先代女王様の名前なんか出さんやるな。どれみちゃ
んのいたずらは、いたずら相手以外に迷惑かけるよ
うなもんとちゃっし。

「まあええか。中身、中身、と。んー」

『成人の日の夜中の0時、

よく使う細長い物を手に持って、

夜空に向かってマジカルステージなさい。

きつと、よいことが起こりますよ。

『ユキ』

「ええこと、かあ」

ユキ先生の『ええこと』ちゅうのはちよーっとマユツバやけど わざわざどれみちゃんを送ってきた、ちゅうことは、きつとみんなにも届いてるんやろうな。

美空小を卒業して、もう8年。全員で顔合わせることに、結局なかつたしなあ。中学高校で仲良うなつた子もあちこち散らばつてもつたし。

「成人式なんて、なんもせんでええ、て思つてたけど」

8年ぶりに、みんなと同じことする、かあ。それも、ええかもしれへんな。なんも起こらんでも、おなじ時間に、みんなでおなじことするんや。悪くないこつちやないか。

そんじゃ、その『細長いもん』探そか。ええとあれ？

「いつまでに探せばええんやろ？ 成人の日の夜中0時 いつやつたつけ、成人の日て？ ええと、カレンダーは いろいろ!!」

机の脇に置いとくつばなしの1月のカレンダー、正月と日曜以外で赤くなつてんのがひとつ

「1月の10日やて!!」

その真下に、『夜勤代理』て書き込みがあるわ。昨日、あたしが自分で書き込んだもんや。

あつちやあゝ。そこ、どーしても休みたい言うから、クラスの子あと代わつたつたんやつた。まさか成人の日やなんて。せつかく8年ぶりやのに

(今度の祝日の当番は、あいちゃんやて？ そら嬉しいなあ。いつも、元気もろてるからなあ)

どないしょか、て考えてたとき、頭んかに声が聞こえたわ。今日のお昼に、山内さんのはん運んでつたとき、言われたこと

「よつしや、やつたるやないか！ 病院の上で、マジカルステージやつ!!」

7 よぞらのたいおんけい

明日は成人の日。せやけど、あたしは今日も夕方から病院に登院。この言い方も慣れてきたなあ。最初は何度言つても妙ちくりんな感じやつたんにな。

「妹尾さん？」

ナースルームに入ったら、婦長さんに声かけられたわ。なんでか、あたしが来る日の来る時間には必ずおるなあ。

「はい、ただいま登院しました」

語尾は、伸びてへん。よし。

「よろしい。夜勤は2回目ね、ちゃんと働いて、ちゃんと休むこと。いいわね？」

「はいっー！」

「休憩入りますー」

0時になる、ちょっと前。あたしはナースルームに

声かけた。これから30分、あたしの仮眠の時間や。

「院内携帯は持ったわね。それじゃ、休めるだけしっかり休みなさい」

婦長さんの声に押されながら、あたしはその足で、屋上上がった。

誰もいない、真つ暗な屋上。もうすぐ0時やから、だれも見えてへん。せやけど

「結局、身近な細長いもん、ちゅうたらこれしかあらへんかったなあ」

細長いケースを開けて、取り出したんは、目盛りがぎょうさんついた、ガラスの棒。とりあえず、すぐには使わんやろな、ちゅう古い体温計。あたしが持ってきたんは、それやった。

あたしは最新の電池式よりこっちのほうが好っきやし、マジカルステージに液晶表示なんて似合わへんしな。まあ、おんぶちゃんあたりは五十歩百歩やー、て言うかもしれへんけど。

あ、そろそろ0時やな。

あたしは、空を見上げた。多分いま、どれみちゃんか呪文唱えとるはずや。

ほな、体温計をしっかり持って　次は、はづきちゃんの番。

さあ、あたしや。空に向かってまっすぐ伸ばして「パメルクラルクたからかに！」

もう8年も前なのに、手を伸ばしたら、ぼろって呪文がこぼれたわ。次はおんぶちゃんやな。

まあ、4年もやっと思ったんやもんなあ。最後はももちゃん　よっしゃ、仕上げや！

「マジカル　マジカル・ステージっ!!」

空に向かって放り投げた大声が、そのまま夜空に消えてまう。あたしは、思わず苦笑いしてもうた。

「ま、こんなもんやな。さあて、ちよい仮眠して、仕事に　ん?」

降ろそうとした右手が、動かないやて?　あ、

体温計が光っとん。

そう思ったら、すぐにあたしの回り全部が光ってもうたわ。

あん?　光の中に、ぼわーっとなんや浮かんできたわ。あたしの右のほうにフルートと、箏^{はし}。左のほうにはマイクと、泡だて器?　なんやろ、なんかわかるような、わからんような

「なにこれ?　マイクに体温計に　全然関連ないじゃん」

考えとつたら、光ン中から声がしたわ。今の声、ひよっとして

「どれみちゃん、かあ?」

「え?　あいちゃん!」

「どれみちゃん、あいちゃん。わたしもいるわ。フルートを持つてるの」

久しぶりの、はづきちゃんの声や。　ちゅっことほ。

「なんやゴチャついてるから、整理しよか。」

みんな、今から呼ぶから、返事してや。フルート、はづきちゃん」

「はい、ちゅうちゅ、ちゅうちゅとのんびりした声が聞こえてきた。これでひとりやね。」

「泡だて器、ももちゃん」

Yes!ちゅうちゅ、元気な声。これでふたりめ。」

「マイク、おんぶちゃん」

いるわよ、ちゅうちゅ澄んだ声。さんにんめ、と。」

「ちゅうちゅと、箸はやっぱりどれみちゃんかあ」

最初はなっから見当はついてたけど、ついたため息出てまうわ。」

「ぶー！ あいちゃんだって、体温計じゃないさ」

「へへーん、ええやろ？これはあたしの仕事道具や」

「まったく。『ぶー』なんて二十歳はたちが言うかあ？あ

たしまでつられてもうたやんか。」

「こっちだって仕事道具だよ！腹が減っては」

「あー、もうええ。聞かだけソソちゅうちゅもんや」

「あーあ、まわりでみんなして笑わらてるやん。変わらんなあ、ほんま。」

「揃そろったようじゃな、みんな」

「あたしが笑い終わったあたりで、別の声が聞こえてきたわ。よお覚えとる、このダミ声」

「「「「マジヨリカ!?!」」」」」

「びっくり声がらつ重なってもうた。みんな気持ちと同じやな。」

「なんでマジヨリカなの？ユキ先生は？」

「どれみちゃんが、代表して訊いてくれたら、」

「わしじゃ悪いか？」

「その瞬間、まわり中から一斉に声が飛んだらわ。」

「当たり前でしょ。だの『悪くないけどやっぱり』だの『騙りはよくない』だの『ごちゃごちゃと』

「ええい、やつかましいいっ！先代女王様はお忙し

い方なのに、この魔法だけでなく伝言まで残されたんじゃぞ!? 伝えに來ただけ、ありがたいと思わんかい!」

怒鳴り声がおさまったら、さっきまでがウソや思うくらい静かになっただわ。先代女王様、ユキ先生かぁ。何を言ってくれるんやろ

「おほん! それでは、お言葉を伝えるぞ——

『みなさん、成人おめでと。大切なみなさんの力に、ほんの少しでもなりたいと思っ、みなさんの道具に魔法をかけました。』

いま、夢見ていること、目指していること、その思いを、その道具を見たとき思い出す魔法です。

5年後か、10年後か、みなさんが力を發揮したいとき、その道具がほんのちよつとだけ力を添えてくれることを、私は望みます。成人、本当におめでと!』

——以上じゃ。じゃからな、みんなその道具をいっつも大切に持つて」

「そ」

誰かの声が聞こえて來た。あたしも口だけ開けて、声が出てこなかったけど、

「ん、なんじゃ?」

マジヨリカの不思議そうな声で、どっか切れてもつたわ!

「そういうことは、最初に言わんか〜いっつ!!!」

「は? な、な、なんじゃ??」

わけわからん、ちゆうマジヨリカの声にカチンときて、あたしらまた一斉に声飛ばしたつたわ。

「病院の体温計、持つてきてもうたやんか。どないすればええつちゆうんや!?!」

「わ、わたし、このフルートって試験でつかうから、目立つの困る〜」

「毎日泡だて器が光ってたら仕事にならないヨ!」

「いっつも口元からスポットライトなんて、冗談じゃないわ!!」

「光った箸で食べさせたら子供逃げちゃうじゃん!!
ちよつと、マジヨリカっ!」

「い、いや、わしに言われても、その それは先
代女王様の魔法で、な? な?」

「なにが『な?』や。『マカされへんで!」

「あたしはマジヨリカの声がする方向に一歩進んで、

「「「「ん〜!!!」」」」

唸うなったつたら、また声が重かさなつたわ。さあて、ど
ないしたるか て思おもてたら、

「大丈夫だいじょうぶだよ。それ、もうじき光らなくなるから」

新しい声と一緒に、ぼんっ、と目の前にびんが出
てきた。

「ハナ ちゃん?」

最初に声出したんは、どれみちゃんやった。

「せや。目の前のびん、忘れるわけないわ。何度も
使ったことあるもんなあ、この哺乳びん」

「そうだよ。この哺乳びん、どれみたちとの思い出
だから持ってきたの。でもこれにも魔法がかつちゃっ
た。新しい赤ちゃんに譲ゆずるつもりだったんだけどな」

「はあ、つてひとつ、ため息聞こえたと思たら、

「みんなさ、あんまりマジヨリカ怒いからないであげてよ」

「静かな声が、哺乳びんから聞こえてきたわ。声は
同じやけど、ずっと静かにしゃべってん。これ、ほ
んまハナちゃん ?」

「ハナちゃん、知ってるよ。この魔法、マジヨリカ

がユキ先生にお願いしたの」

「へ? マジヨリカが?」

「まだ会いに行けるほど人間界と近くないけど、せ
めて人間の成人の記念に、なにか贈りたい、つて。な
に贈ったら喜んでくれるかわからなくて、3日も徹
夜してたんだよ♡ だから、ハナちゃんがユキ先生
を呼んであげたの」

マジヨリカの声は聞こえへん。逃げたんやろなあ。まあ、こんなんをやさしい声でバラされたら、居心地悪うてたまらんやろしな。

ほんま 声は同じなのに、やさしい言葉や。

「 大きゆうなつたんやなあ、ハナちゃんは」

「へへ。まだまだ、人間界となかよしにできてないけどね」

まわりから、暖かい笑いが聞こえてきた。みんなきつと、同じこと思ってるんやろなあ。さつきは変わってない、て思うてたけど ン？

「 て、そういえば、どれみちゃん。さつきんや、変なこと言つてたな。』この箸で子供に食べさせる』とか いま、なにやつとんのやつたっけ？」

「え？ いやー、へへへ」

ありや？

「えへへ、て。なーにゴマカしてんねや、こら」

あたしが一歩、箸に近づいて言つたら、マイクから「あいちゃん、ちょっと待って」

て声。おんぶちゃん？

「いい？ ー」の中で、もう夢を叶えちゃった人、返事してー！」

おんぶちゃんの声が響いたとたん、光の中が静かになってもつた。そらそうや、あたしだってまだ看護学生 夢のどっかかりに、ようやくくがみついたばっかやもんな。

「ね、みんなまだでしょ？ だつたら、いまは根掘り葉掘り聞かなくなつていいじゃない」

あたしは、握つたまんまの体温計、目の前に持ってきた。きれいに光つて、中の温度がちよい読みにくいくらいやけど、

「これ見るたびに夢を思い出すんやつたら、諦めるなんてでけへんしなー」

あたしが言つたら、みんなの声がうなずいてくれる。言葉は違ってたつて

「そうだよ。ハナちゃんだって、もうこうなつたら哺乳びんの女王様を目指しちゃうんだから♡」

せや、心はひとつやもんな。

あれ？ 体温計の目盛り、ちよい読みやすくなつたみたいに見えるで？

「あら、光が」

はづきちゃんの寂しそうな声で気がついた。ほんまや、まわりの光も弱よわなつてきてるわ。

「ああ、これで、またみんなの声、聞けなくなつちゃうのかしら」

「終わりじゃないヨ。こんなの、何度もあつたじゃない！」

「ええ、また今度。今度は、顔を見て話したいわね」
ゆつくりやけど、光と一緒にみんなの音が小さくなつてく。そんな中で、いつもあたしに元氣くれる声が響いた。

「そうだね。よっし！ そんじやみんな、夢を叶えたら報告。今度は顔合わせて会おうよ。いいね？」
消えかけてるどれみちゃんの声に向かつて、あた

しは叫んだつた。

「おーっ!!」

きつと小さくても、みんなの声は重なつてるはずや。大親友なんやから♡

*** **

まわりから光が消えてから、あたしはシャツのポケット開けた。まだちよつとだけ光つてる体温計、まだけでも入れとこ、て思たんや。

きつと、もうすぐ光は消えてまう。ナースルームに戻つたら返さなあかん。せやけど

「妹尾さん？」

うわわっ!!

ギリギリで声だけは出さんかつたけど、い、いきなり背中から、この声

あたしは、そーつと後ろ向いてみた。まるでホラー映画の主役にでもなつたみたいや。そしたら あ

あ、やっぱり、婦長さんが腕組みして立ってん。屋上の入り口からの光あびて、表情はわからへんけど、きつと怒ってるんやろなあ。ちゃんと休め、言われたんに、こんなとこで休み時間ムダしてもうてるんやから

「妹尾さん」

静かな声や　まさか、見られたうちゅうことはな
いやるな？ ああ、はつきちゃんやないけど、マジヨ
リカの名前唱えなくなってるわあ。

「その体温計、ケースはある？」

て、なんや？ ケース？

「はい、ありますけど」

「ちよつと貸して」

なんやようわからへん。あ、黙って持ち出したからなんかな？ でもそれやったら、中身なしでケースだけちゅつのは？

なんて考えながら、あたしが細長いケース差し出してたら、

「あ痛っ！」

いきなり手えが痛なって、ケース落としてしもた。
え、ええっ？ 手え叩かれた!?

パキッ！

「あーあー、ダメですよ妹尾さん、体温計を落としたりしちゃあー。もあー、踏んで壊してしまっただじゃないですかあー」

へ？

「ま、踏んだのは私ですから、しかたありませんね。破損報告書は書いておきます」

な、なんや？ なにが起こってるんや??

「もう、ここに体温計はないはずよね？」

あ　　！

「は、はいっ！」

あたしの手の中で光ってた体温計が、だんだん暗くなってくとこ、婦長さんがじつと見てて　光が消えたらすぐ、屋上の入り口に向き直ったわ。

「夢を思い出すもの、か　ちゃんと、大事になさいね」

屋上のドアに消えてく婦長さんの背中におもいきりお辞儀して、体温計をポケットにしまってから、あたしはその後に続いたった。

さあ、キツくつても頑張るか。

シャツのポケットには、夢が入ってるんやから。

—おしまい—